

大学史料室通信

農大

第 2 号
2012. 12. 1

大学史料室所蔵史料の紹介（一）

榎本武揚の書（一八九二年〔明治二十五年〕）武揚五十七歳

〔翻刻〕

鎌府江山入晚鴉過秦有客
懐長沙路傍苔石留城址化
作尋常百姓家

壬辰二月過鎌倉有感詩以紀之梁川

〔書き下し文〕

鎌府江山晚鴉（ばんあ）入る

過秦の客有り長沙を懐う

路傍の苔石城址を留め

化して尋常百姓（ひやくせい）の家と作る

壬辰二月鎌倉に過（よ）ぎりて感有り、詩以て之を紀（しる）す。

〔語釈〕

・鎌府↓鎌倉。

・晚鴉↓夕方の方からす。夕暮に飛ぶ鴉。

・過秦↓過秦論。

・客↓賈誼のこと。前漢の文人・政治家。文帝に仕えて種々の改革を図ったが保守派に阻まれて左遷された。

・長沙↓賈誼が流された土地。

・百姓↓ここでは農民の意味ではなく人民の意。

〔大意〕

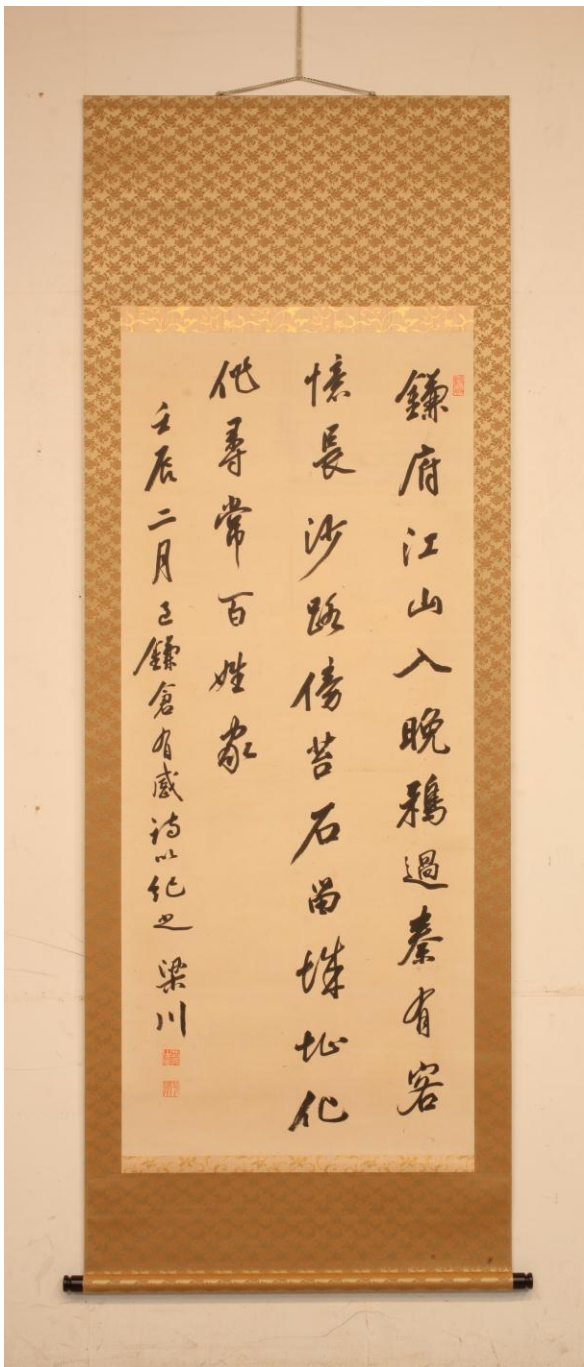
・第一句二句

鎌倉の山河では、烏が鳴く夕刻となり、私は秦の時代の過ちを記した賈誼や彼が流された長沙の町に思いをはせる。

・第三句四句

この鎌倉では道の傍らの苔生した石には、いにしへの城の跡を留めているが、今は市井の人々の家となっていることだ。

壬辰二月に鎌倉に立ち寄って感慨があつて、漢詩を作り之を記した。



学党と学校党の政争が激しい。この実学党革新派の父のもと時敬はどんな家庭教育を受けたであろうか。残念ながら直接的史料はないが、その周辺の、間接的史料はある。熊本の高い伝統的文化と父の革新的雰囲気や育ったと想像されるが、時敬七歳の時に父は逝去している。時敬の家庭教育復元は間接史料の収集と分析で可能であると筆者は思う。

時敬が藩校時習館に入門したのは確実のようだ。しかし何歳で入門したかの報告を筆者は知らない。熊本大学文学部保管の「永青文庫」に時習館関係の史料がある。龐大な大史料集で目録もある。丹念に目録を見て心当りの史料を直接調べ、時敬の直接史料（入門帳など）や周辺史料（教科課程、教科書など）を見付けたいものである。

一八七一年（明治四年）九月一日、時敬は熊本洋学校に入学し、一八七五年（明治八年）七月二十七日に卒業した。その後



熊本・横井家墓碑と墓誌(寄墓、市営墓所所在地)

同校助手を勤めた。駒場農学校（後の東大農学部）入学の動機も洋学校米人教師ジェーンズの影響によることは確実

である。しかし洋学校の史料は意外にも少ない。実学党と学校党の激しい政争によるものと筆者は推測する。洋学校は実学党の人々による開校である。権力の移動により史料の保存と消滅は影響を受ける。さいわい地元熊本で洋学校再評価の声は高く、近年研究会も発足（筆者も加入）し、多くの市民も参加している。時敬の直接的史料や間接的史料はその史料を使った論文と共に公表されることを期待している。

時敬の熊本時代の研究は始まったばかりの感がある。熊本市民の多くは時敬の存在したことを知らない。「生誕之地碑」を建立し、絶えず市民に呼びかけ、東京農業大学の永続を筆者は熱望するものである。

参考文献

- 相馬登(二〇一三)『横井時敬の熊本時代』レジメ。
- 友田清彦(二〇〇九)『横井時敬の足跡と熊本』東京農大出版会。
- 熊本県立大学編(二〇一三)『ジェーンズが遺したものの熊本日新聞社。』
- その他

世界に先駆けた教育

東京農業大学教授
夏秋啓子

東京農業大学(TUA)と Food and Fertilizer Training Center (FFTC)との共催による 2012 TUA -FFTC International Seminar on Emerging Infectious Diseases of Food Crops in Asia が、東京農業大学世田谷キャンパスにおい

て二〇一二年十月二十日、二十一日に開催されました。日本を含め七カ国十七名の招待講演者による講演が行われ、参加した関係者は約五〇名、また、学生・院生の参加者は二日間の合計が約一五〇名となりました。"アジアの食用作物栽培において新たな問題となりつつある病害"をキーワードに、日本、およびアジア太平洋洋州の作物保護学に関わる大学や研究機関だけでなく、植物防疫に関わる行政機関、種苗会社など様々なセクターの連携の重要性が再認識されたセミナーでした。



*アルバム 根腐病

さて、この会場において、東京農業大学のコレクションとして図書館からご提供いただいた、白井光太郎博士の撮影した植物病害の写真アルバム、病徴と顕



微鏡観察図、そして、植物の彩色画が展示されました。英文の解説には「日本の植物病理学の父 白井光太郎博士；白井光太郎博士（一八六三—一九三二）は、一九〇六年に世界で最初の植物病理学研究室を東京大学に創設した人物であり、また、東京農科大学の教授としても一九一五年から一九一九年まで教鞭をとった。その間、日本植物

病理学会を設立し、一九一八年からは初代会長として活躍した。現在、日本植物病理学会は二〇〇〇名近い会員を擁する。」と紹介しました。セミナーでは内外からの多数の植物病理学関係者が参加していたため、長い歴史を誇る東京農科大学で、世界的な観点からもごく早い時期から植物病理学の教育が行われていたこと、白井光太郎に

関するコレクションがあることなどに、興味が集まっています。た。育が行われていたこと、白井光太郎に



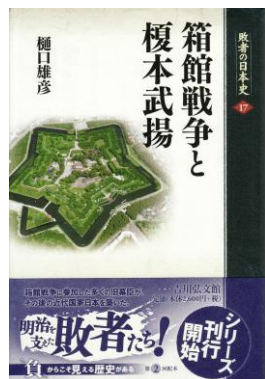
* 植物彩色画 枇杷

育が行われていたこと、白井光太郎に

大学史関係新刊書の紹介

樋口雄彦(二〇一二)『箱館戦争と榎本武揚』

吉川弘文館、二六〇〇円。



本書は吉川弘文館の「敗者の日本史」シリーズの一冊として刊行された。著者の樋口雄彦氏は、大著『沼津兵学

校の研究』など、旧幕臣の研究で知られる。本書のタイトルは榎本武揚となっているが、主人公は榎本一人ではなく、箱館戦争の多くの「降伏人たち」（旧幕臣）である。降伏人たちの戦後の軌跡は様々であった。榎本のように明治新政府に登用され、栄達の途を辿った者。官には就かず、民間にあつて実業の世界に驥足を展ばした者。宗教家に転じていった者。あえて世捨て人の途を選んだ者、等々。本書では、その多彩な姿が、「箱館戦争断章」「生き残りたちのその後」「雪冤への道」「戦友の再結集」の各章で描き出されている。

箱館戦後、明治に入り、旧幕臣たちの再結集の場となったのは、碧血会、旧交会、同方会、葵会などである。静岡育英会は一八九一年、東京に育英會を設立する。育英會の四つの学科のうちの一つが農業科で、のちに独立して私立東京農学校となった。東京農科大学の前身である。本書における静岡育英会に関する記述は、短いながらも重要である。また本書の口絵ならびに本文に掲載されている「私立東京農

学校卒業証」と「育英會の及第証書」（第一期生・井口幹夫氏）はわが大学史にとっても貴重な資料である。（友田記）

編集後記

『大学史料室通信』第二号をお届けします。本号からは、大学史料室が所蔵する史料を逐次、紹介していくことにいたしました。第一回目は、榎本武揚の書です。榎本が育英會の管理長であった時代のもので、また、相馬登先生には、先生が最近明らかになった横井時敬の熊本時代に関連する知見についてご寄稿をお願いしました。さらに、夏秋啓子先生には、本年十月に本校で開催されたセミナーでの白井光太郎史料の展示について、ご報告をお願いしました。

*本文中で*印の付いている資料は当史料室の所蔵資料です。

当史料室では東京農科大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農科大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで一報くだされば幸いです。

東京農科大学

世田谷学術情報センター(図書館)大学史料室

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話…03-5477-2526

FAX…03-5477-2546